

十三商割りの始め方（先生向け）

1. 十三商割りとは

先生が読み上げる「実数」と「法数」を使った、わり算の練習です。何人でも同時に取り組みます。正解するたびに、四商割り・七商割り・十商割り・十三商割りの順に段階が進みます。

2. 用意するもの

- ・ 先生：十三商割りの用紙（答えの表）
- ・ 生徒：そろばん、法数を書き取る紙、筆記用具

3. 実数と法数の読み上げ

- ・ 先生が実数を1桁ずつ読み上げ、生徒はそろばんに置きます。例）実数 142884 は「1、4、2、8、8、4」
- ・ 続いて、先生が「法」と言ってから法数を読み上げ、生徒は紙に書き取ります。例）法数 965742 は「法、96万5,742」
- ・ 先生が読み終えたら、全員いっせいに計算を始めます。
- ・ 法数の0は「飛んで」と読むことがあります。
965042 は「96万5千、飛んで42」
905742 は「90万5,742」
900742 は「90万飛んで742」
965002 は「96万5千、飛んで飛んで2」

4. 答え方（全員が四商割りから始める）

実数を法数で割り、商を4回立てます。計算できた生徒から、2段階で答えます。

例）法数 962514 の四商割りは、あまり 469224、おや（最後に立てた商）4

- ・ 第1段階：生徒があまりの下2桁を言います（「2、4」）。正しければ、先生が同じ数を言い返します（「2、4」）。違っていれば先生は何も言わず、生徒は最初から計算し直します。
- ・ 第2段階：言い返された生徒は、あまりの残りとおやを言います（「4、6、9、2、おや4」）。正解なら、先生が「御名算（ごめいさん）」と言います（「御名」と略すこともあります）。
- ・ あまりの末尾の0は言いません。用紙にも書いてありません。例）あまりが 095130 なら、用紙は「09513」、下2桁は「1、3」
- ・ 早い者勝ちです。正確さと速さの両方が大切です。

5. 次の問題への進み方

- ・ 1問終わるたびに、先生は同じ実数をもう一度読み上げ、続いて新しい法数を読み上げます。生徒はそろばんをご破算にし、実数を置き直して計算します。
- ・ 前の問題で正解した生徒は次の商へ進みます（四商割りで正解したら、次の問題から七商割り）。正解していない生徒は同じ商を続けます。
- ・ 同じ問題でも、生徒によって取り組む商が違います。

6. 十三商割りまで進んだら

十三商割りで正解した生徒は、そのまま十三商割りを続けるか、暗算に切り替えて四商割りからやり直します。

7. 慣れてきたら

法数の覚え方に決まりを足して、難しさを変えられます。計算力に加えて、集中力や記憶力も鍛えられます。

- ・ 法数の最後の1桁、または2桁を書かずに覚える
- ・ 法数をまったく書かず、すべて覚えて計算する

実数	142884
----	--------

法数2位

(四商割・七商割・十商割・十三商割)

	めやす	四商割		七商割		十商割		十三商割	
		おや	あまり	おや	あまり	おや	あまり	おや	あまり
A	97	3	03	0	9	7	81	5	05
	83	/	41	3	81	5	75	3	51
	71	2	32	0	5	4	16	5	25
	65	8	14	5	25	4	4	5	25
	52	7	4	9	12	0	4	9	12
	41	4	4	5	25	9	31	6	04
	37	/	27	9	27	9	27	9	27
	26	5	14	8	12	/	14	8	12
	17	4	16	/	03	6	08	0	/
B	95	4	04	2	/	5	25	3	15
	89	5	39	8	18	2	22	7	17
	76	0	04	2	48	/	44	8	72
	69	0	54	2	42	8	48	5	45
	57	6	42	6	48	2	06	5	15
	46	6	08	3	42	3	02	3	22
	38	0	04	5	/	3	06	7	34
	29	7	01	4	14	2	22	8	18
	19	0	04	0	/	6	06	5	15